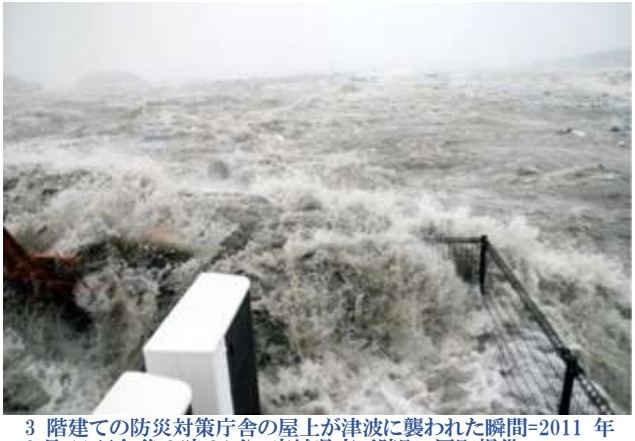
東日本大震災 3.11 震災・復興
あの日、私は津波にのまれた 町長が語る「拾った命」

朝日新聞 2021 年 2 月 28 日 配信

2011 年 3 月 11 日。宮城県南三陸町は東日本大震災の津波に襲われ、市街地が壊滅。831 人が犠牲になった。あの日、町防災対策庁舎で指揮を執っていた町長の佐藤仁(69)も屋上で津波にのまれ、死にかけた。職員ら 43 人も失った。あれから 10 年。住宅や公共施設の高台移転は進み、復興事業はゴールが見えた。目の前のエネルギッシュな首長が、死線をくぐり抜けた生き残りであることを知る人も少なくなった。人口 1 万 2 千の小さな町で、陣頭に立ち続けてきた指揮官の胸の内を紹介する。

南三陸町役場は防災対策庁舎の鉄骨だけ残して消滅した=2011 年 3 月 25 日午後 2 時 2 分、宮城県南三陸町



3 階建ての防災対策庁舎の屋上が津波に襲われた瞬間=2011 年 3 月 11 日午後 3 時 34 分、宮城県南三陸町、同町提供

震災直後の南三陸町防災対策庁舎。津波は高さ 12 メートルの庁舎屋上まで襲った=2011 年 4 月 14 日午後 4 時 3 分、宮城県南三陸町志津川

屋上で流された職員たち

――2020 年 10 月、震災復興祈念公園が全面オープンしました。庁舎に献花した時、どんな思いでしたか？

言葉では言い表せません。見つからないんです。3 月 11 日、屋上で味わったあの寒さとショックは。目の前で、役場と男性職員の家がつぶれていく。家の中に奥さんがいるんです。女性職員が奥さんの名を金切り声で叫ぶ、そこへ津波。波が引いたら、あれだけたくさんいた職員が、たった 10 人しか残っていなかった。女性職員も姿が見えない。そばには俺とその男性職員の 2 人だけ。恐ろしい現実でした。

――屋上のアンテナに上って耐えました。

津波は 2 回、3 回と襲ってきました。太いアンテナに 7 人、細い方に 3 人。アンテナに巻き付けられている電線に足をかけて登りましたが、4 回上り下りしました。いまやれと言われても到底できません。

――階段の手すりに引っかかって助かりました。

最初は海側にいましたが、町役場が折れて(防災対策)庁舎にぶつかってきたので、様子を見ようと階段側に移動した時、波をかぶってフェンスに押しつけられました。もし元の位置にいたら、みんなと同じように流されていたでしょう。津波がせり上がり、屋上の私たちをのみ込むまで、まばたきする間でした。

――あの瞬間はいまも鮮明ですか？ はっきり思い出せます。ただ数年前、生存者が集まって記憶を突き合わせたのですが、一人ひとり覚えていることが違いました。どこにいて何をしていたのか、時系列がバラバラ。みんな自分が正しいと思っているものだから、全然かみ合いませんでした。

――いまも当時のことを思い出しますか？ 震災 3 年目ごろまで、朝起きると家族から「ゆうべもおぼれていた」とよく言われました。水の中で息ができない悪夢。寝ながらもがいていたようです。当時は枕に頭をつけるとすぐ眠りに落ちるくらい、疲れ果てていたのですが。怖かったのは自動洗車機です。震災 2 年目でし

たか、車を洗おうとした時、前から水が迫ってくる様子を見て津波を思い出し「止めろ！」と叫んで外に出てしまいました。一時は地下鉄も地下街も「水が入ってきたらどうしよう。火事になったら逃げ場がない」と、敬遠していました。そんな私を見て、町に来た米国の精神科医が PTSD だと言ってくれました。だいぶ良くなりましたが、自動洗車機だけはいまもスタンド任せです。

防災対策庁舎の中のがれきを撤去しながら行方不明者の捜索をする自衛隊員=2011 年 3 月 17 日午後 1 時 24 分、宮城県南三陸町

公務員の悲哀を　いやというほど

――震災翌年、避難誘導が不適切だったとして、職員の遺族から告訴されました（不起訴処分が確定）。

警察から事情聴取されたとき、「津波の予想高が 20 メートルだったら逃げたか」と聞かれました。「我々は逃げない、逃げられない」と答えました。我々が情報発信しなければ誰が避難を呼びかけるのですか。町民がいっぱい死ぬ。そんなことはできない。結果として（庁舎で）多くの犠牲者が出たが、公務員はいざという時逃げられない。その立場はいまも変わっていません。

インタビューに答える佐藤仁町長=2020 年 10 月 23 日午後、宮城県南三陸町役場

――殉職覚悟だったと？　違います。当時、気象庁の津波の第一報は予想高 6 メートル、庁舎屋上の高さは 12 メートル。到達予想時刻は午後 3 時で、私が着いたのが午後 2 時 55 分。5 分後に津波が来ると分かっているのに、そこにいる人間に「下りて（数百メートル離れた）高台へ行け」というのは無理でした。誰も命を賭すなどとは思っていません。結果としてさらに高い津波が来ましたが、その時は全く想定できませんでした。

無線放送の設備があった町防災対策庁舎の 2 階。隣接していた町役場など大半の建物が消滅した市街地の向こうに海が見える=2011 年 4 月 8 日午後 5 時 48 分、宮城県南三陸町志津川

――「動けなかった」ということでしょうか？

危機管理の中枢と防災無線の放送設備が防災対策庁舎にしかなかった以上、誰かが踏みとどまり、避難を呼びかけないといけませんでした。役場職員だけ全員避難して誰も放送しなかったとしたら、みんな町民から袋だたきにあっていたでしょう。自分たちさえ助かれば良いのかと。

――自動放送だったならという声もありました。 あの日、三浦毅（危機管理課長補佐）と遠藤未希（職員）が必死で「避難して」と言い続けましたが、定番にない呼びかけでした。平時なら自動放送でもいいのですが、町民の命を左右する非常時は、おのずとその重大性に合わせ、緊迫感を持って放送しないといけない。美談にする気はありませんが、2 人はそれを全うし、最後まで放送を続けました。私も幹部も、みんな庁舎を目指して集まらざるを得なかった。そして逃げるわけにはいかなかったのです。

――大災害の時は公務員自身も被災者になります。自身の被災と公務と、心が引き裂かれることもあります。 どちらを優先しなければならないという明文化されたルールはありません。防災計画に従って動くのみです。ただ私は震災後、役場職員の採用面接の際、必ず「公務員をなめるなよ。災害に遭ったら、自分の家がつぶれても仕事しなければならないんだぞ」と言います。その覚悟があるのかどうか、見定めます。

今回の震災で、公務員の悲哀をいやというほど見ました。半分つぶれた自宅で父親が死んでいたのに、遺体を 2 階に上げて出勤してきた職員もいました。休ませたいが、できない。罹災（りさい）証明書を出さな

いと住民が生活再建できないし、現場にも行かねばならない。みんな自分のつらさをこらえて立ち向かったんです。避難所に毛布が届いても、高齢者が寒いと言えば自分の毛布を渡し、何もかけずに寝る。住民が炊き出しをほおばっても、横を向いて見ないふりをする。それが公務員なんです。そもそも食料が足りない、着るものもない。町民がろくにメシを食えないのに、公務員が先に食えますか？　自分のことは後回し。「食いっぱぐれのない商売でいいね」なんて言われますが、冗談じゃない。甘く見るな、です。

震災翌月、定例会見に臨む佐藤仁町長（左）

――行革で公務員が減っています。　結果としてこういう大災害が起きたとき、特に土木職員の手が不足します。日本全国同じ状況です。災害が多発し激甚化する中、何としても人材を育てなければいけません。国も考えていると思いますが、一朝一夕には難しいです。

発災直後は公助も共助も来ない

――自助、公助、共助。災害では何を一番念頭に置くべきでしょうか？　発災直後はまず自助です。公助も共助も来ません。講演でもよく言いますが、行政を頼りにしてはいけません、自分の命は自分で守ってくださいと。みんな命がけの時に、誰かが助けてくれるなんて思わないでください。仮に備蓄食料があっても配れません。3・11 当時、240 人の町職員で 1 万 7 千の町民一人ひとりに渡せるわけがない。備蓄は必要ですよ。でも配分は地域の人たちに任せざるを得ないんです。ところが、災害があると住民は待ってますよね。役場はなぜ来ないんだと。それじゃダメなんです。自分から動かないといけないんです。どこの自治体も、災害対応を住民と話し合うとき、安易に「役場でやる」と答えがちですが、できることとできないことを明確に線引きしておかないといけません。期待感を持たせるのは誤っています。ある自治体でシンポジウムをやったとき、そこの首長に川沿いの住民が「水害時に支援物資はどう届けるのか」と聞いたら、首長は「全部自治体でやる」と言います。できないものはできないとはっきり言わないといけません。備蓄地点を示して、何とか持って行ってくれと言うのが正しいのです。私はそんな講演では「人間 2、3 日飲まず食わずでも生きていられます。3 日も経てば水の 1 杯や 2 杯は飲めます」と言うことにしています。むしろ我慢できないのはトイレです。発災直後はそれが一番切実な問題になるでしょう。人は、上から入れなくても下からは出る生き物です。町は地面に穴を掘って即席のトイレが造れましたが、コンクリートの都会ならどうなることか。マンホールトイレという手がありますが、東京ならそれをそこら中に造らないといけなくなります。もう一つ大事なのは「近助（きんじょ）」。講演に行った町で、保健師の方から教えて頂いた言葉です。その方は、こんな風に言っていました。「近所と仲良くしてください。優しい人、文句ばかり言う人。1 人しか助けられない場合、どちらを助けますか？　いつも優しくしてくれる人を助けるでしょう？　だからご近所づきあいは普段からちゃんとしてくださいね」。その通りだと思いました。

2020 年度の成人式であいさつする佐藤仁町長=2021 年 1 月 10 日、南三陸町総合体育館

――体育館で雑魚寝という避難スタイルについての考えを。新型コロナのクラスター（感染者集団）の発生が心配です。　3・11 当時は、町内で大人数を受け入れられるのは町総合体育館（ベイサイドアリーナ）しかありませんでした。プライバシーが保てないという指摘がありますが、体育館の中にテントを立てればいい。「事前復興」として、あらかじめ用意しておいてもいいのではないでしょうか。熊本地震で自家用車避難と車中生活を見ました。コロナ禍、他人と接触しないためには、家族は車内で、車を持っていない高齢者は避難所（体育館）でと切り分けた方が良いかもしれません。2020 年秋、町でもコロナを念頭に防災訓練をしましたが、避難所に仕切りを立て距離を取って収容すると、想定の 2、3 割しか入りませんでした。残りはど

うするか。悪天候だったら。小さな町でこれですから、コロナ禍の下で南海トラフや首都直下地震が起きたらどうなるのでしょうか。

――当時の混乱を知る職員が減っていきます。 震災後に採用した職員の数は、プロパーの 4 割を超えました。「(町民の被災の記憶は)風化していますか」と聞かれますが、実は役場の中でこそ、記憶の風化が進んでいると言えます。職員への伝承は、大きな課題です。

全額国費の復興　多分もうない

――復興の在り方についてお尋ねします。「事前復興」を提唱していますが、どこから手をつけたら良いのでしょうか？　災害が起きたら仮設住宅をどこに建てるのかという見定めです。近くに水道があって電気も通っていて、できれば平地。適地を調査しないといけません。被害はハザードマップで想定できますから「津波で 500 戸やられる、どこへ移転させるか」という問題を、あらかじめ考えておけばいいのです。そうすれば、災害が起きてもすぐ建てられます。三陸の自治体はリアス式海岸のところが多く、南三陸町も平地が少なくて用地を探すのに苦労しました。どこの田んぼ、畑を借りるかというところから始めなければならず、完成までに時間がかかりました。さらに、高台移転の候補地にも文化財があり、調査で工期が延びました。事前に調べておけば済む話です。災害が起きてからすべてを始めようとすると大変な時間がかかります。

――間口が広すぎて、手をつけかねるという声も聞こえます。

教えてくれる専門家はたくさんいますが、まずお金をかけずにやれるのは、人口減少社会に対応した公共施設の縮小案です。

津波で多くの家屋が流された志津川地区=2011 年 3 月 13 日、宮城県南三陸町

自治体が壊滅し、人口が一気に減ったとします。行政区ごとに集会所があった時、災害後にそれを元通りに復旧させず、「隣の区と合わせて一つにしませんか。その方がお金も時間も節約できます」 という話し合いを、あらかじめ地元としておくのです。なぜなら、全額国費で復興できるのは、恐らく東日本大震災が最後だからです。これからは必ず地元負担が発生します。その時に、税収も人も減っているのに、元通りにインフラを造るのは馬鹿げています。ここはこういう風に減らそうという計画を立てることが、事前復興の一つといえるでしょう。

プレハブの仮庁舎で開かれた南三陸町震災復興計画策定会議の初会合=2011 年 6 月

――災害に伴う人口減を見越し、公共施設の縮小を住民と合意しておくことが「復興」なのですか？

その通りです。事前に災害想定をして、この地区はこのくらいの被害が出て間違いなく人口が減る、ならば、これまでと同じように公共施設を造って有効に使えますか？統合して減らしませんか？という話をするのです。 南三陸町でいうと、本当は漁港を集約したかったのにできませんでした。元々担い手がおらず、水揚げも少ないところばかりだったのでまとめた方が良いと思っていましたが、災害が起きてからだとみんな「自分の所は戻せ」となって、冷静な話ができませんでした。 だからこそ、平時に地域と話し合いをしておかねばならないのです。漁港の復旧なんて大金です。仮に自己負担 1 割を求められたら大変な出費で、自治体の持続的な運営が難しくなります。お金をかけなくてもできる「事前復興」は山ほどあるのです。

小さくする・やめるも「創造的」

――人口減の進む自治体に多額の復興予算を投じることに疑問も出ました。 人口減は災害があろうとなかろうと進みます。それを勘案してまちづくりをするのが「創造的復興」です。なのに、国の基本は「原型復旧」。 おかしいとは思います。 「創造的復興」というと、みんなこれまであった建物をもっと立派なものにすることと誤解しがちですが、人が減ったから小さくしようというのも含むのです。私は講演を頼まれると「創造的復興とは『縮小開発』のこと」 といつも言っています。今後、全国の自治体で計画される「事前復興」は、すべてそこにつながっていくでしょう。

2016 年 8 月、震災後の地域復興を考える取り組みで、仮設住宅の建設場所を話し合う参加者=東京都豊島区

防災対策庁舎の横を村井嘉浩知事（中）、平沢勝栄・復興相（左）と歩く佐藤仁町長

――南三陸町での実現例はありますか？ 震災前にあった公共下水道をやめ、合併浄化槽に転換したことです。震災前、使用料では維持管理費をまかなえず、一般会計から多額の予算を投入しないといけませんでしたので、高台移転後の町に同じように整備するのは反対しました。公共下水道にこだわっていたら（震災 10 年を控えた）いまもたぶん工事が終わっていなかったでしょう。くどいようですが、（インフラを）大きくすることだけが創造的復興じゃないんです。小さくすることも、やめることも、その自治体の未来にとっては「創造的復興」なんです。

――高台移転は大がかりなものになりました。 津波から未来の命を守るには、移転しかありませんでした。その後、津波注意報が出たことがあるのですが、「（家が高台だから）もう逃げなくてもいいと思ったら、心底安心した」と話すお年寄りがいらっしゃいました。ただ、全額国庫負担でなければ、町が破綻していたでしょう。5 年間の集中復興期間が終わった後、2016 年度から事業の一部に自治体負担が生じました。反発しましたが、試算したら受け入れられる額だったので、矛を収めました。

――国との交渉で、町の要望が実現しなかったことはありますか？ 時間はかかりましたが、町として頼んだことで実現しなかったことはありません。妥協した案件はあります。例えば、復興祈念公園は、最初申請した面積より縮小されました。しかし町として痛みを被ったわけではありません。使い勝手のない土地を公園にしたいと申請したら、こんなに広いのはダメだと言われたまで。公園事業そのものは認められたので、町としては達成率 100%ということになります。

――町民の暮らしに関わる部分で聞き届けられなかったものはありますか？ たぶんありません。災害公営住宅の家賃低廉化事業も、手いっぱいやって頂きました。町の財政を逼迫させないようにという配慮だったと思います。ほかの大災害の被災地と同じレベルの補助率に引き下げるとなって物議を醸しましたが、我々は何年も手厚くやってもらってきたので、いまさらダメだとは言えません。つらい思いをしているのは東日本大震災の被災地だけではないことを、頭に置かねばなりません。関西も九州も、みな同じです。その方々と制度を合わせてくれと言われたとき、我々にとってはい

南三陸町内に建てられた仮設住宅=2012 年 9 月

までの手厚さからは後退しますが、同じ国民ですから、分かち合わなくてはなりません。すでに大きな支援を頂いている恩義を忘れてはならないのです。

――公平を考慮した？　我々はいままで、他の被災地よりずっと手厚く支援を受けてきました。同じ苦しみを味わっている国民がいるときに、我々がこの 10 年受けてきた特別な恩恵を、いつまでも受け続けて良いのかということです。公平とは違います。人間としての誇りの問題です。他の災害の被災者にも東日本と同水準の支援制度があればいいのですが、現実にはありません。だから、そういう方々に申し訳ないと思いませんか？ということです。

東京壊滅時の計画はあるのか

――低い方の水準に合わせることになります。理想としては東日本のレベルで支援して欲しいですが、現実にはそうはなりません。理想を掲げるのはマスコミの役割ですが、私たちは現実の中で生きているのです。国民も苦しいですが、国家も苦しい。財政規律は曲げてはいけません。いま、新型コロナでこれだけ財政が悪化しているところへさらに首都直下や南海トラフといった大地震、大災害が起きたとき、国家として日本が存続できるのかという問題に必ずぶつかります。南海トラフの被害額は約 200 兆円と試算されています。首都直下で省庁や官邸が壊滅したとき、すべての機能を移転させられるんでしょうか。そんな時に自助か共助かなんて、聞いている余裕がどこにあるんですか。どう対処するのか、国会議員こそ考えないといけないんじゃないですか？　私は、3・11 で南三陸町が壊滅し、庁舎も破壊された現実を、国に置き換えただけです。首都直下が起きると言われている以上、ない話ではありません。東京が壊滅したときの計画はあるのでしょうか。国家としての「事前復興」は本当に十分でしょうか。

――10 年を通して、何が一番苦労でしたか？　全部「ご苦労」でした。毎日越さねばならないハードルがあり、越すたびに新たなハードルが生まれました。10 年間、365 日やっていると、それが当たり前になってきます。だから順列はつけられません。

津波で全壊した防災対策庁舎=2011 年 4 月

震災知らぬ次世代守るため　防災庁舎残そう

――震災から 10 年。記憶の風化が進みます。悪いことばかりではないと思っています。特に、家族を亡くした方々にとっては時間の経過が重要です。防災対策庁舎の問題が良い例でしょう。震災から数年は残す残さないで大激論になりました。どちらも正しいのに、どちらかに旗を揚げなければならない。これは苦しかったです。5 年目ぐらいまでは、解体を望む人は、私の顔を見るたびに「早く壊せ」と言ってきました。紆余曲折ありましたが、2015 年に、震災から 20 年後まで宮城県が県有化することが決まって、声高な解体論は徐々に沈静化していきました。

――時がそうしたと？　少なくとも私は聞かなくなりました。それが「時が経つ」ということです。つらい思いを過去のこととしてとらえるには、時間が必要なのです。忘れるわけではありません。心の隅にはずっと持ち続けることになりますが、悲しみが少しでもいえるならば、個人にとって、悪いことばかりではないと思っています。ただ、災害の教訓は風化させてはいけない。次世代に強力に、つなぎ続けていかねばなりません。それは町民、誰もが願うところでしょう。町として最大の教訓は、やはり防災対策庁舎です。私は震災直後から「個人的見解」と断った上で、残すべきだと言ってきました。なぜなら、1960（昭和 35）年のチリ地震津波でも旧志津川町（現南三陸町）は市街地が大きな被害を受けて 41 人が亡くなっているのに、遺構がほぼ何もなかったからです。津波の水位を示す標識はありましたが、風景に溶け込んでしまっていました。それを見て、日々危機感を新たにするようなものではなかったのです。　3・11 で我々は、南三陸町は想定外

の津波が来るところなのだと、改めて思い知らされました。その証拠が防災対策庁舎です。今後世代は変わり、震災を知らぬ子どもたちが増えてきます。未来の命を守るために、あの庁舎は残すべきではないか、というのが私の思いです。

――一帯は 2020 年秋、公園として全面オープンし鎮魂、祈りの場になりました。2022 年の春には、公園の川向かいに伝承施設の入った道の駅もオープンします。防災学習として、10 ぐらいのプログラムを用意する計画です。「防災とは何か」「人は災害に向き合ったとき、どう行動しなければならないのか」ということが学べます。初めは「防災学習で何時間も滞在してもらえるだろうか」と思ったのですが、試作品を見始めたらあっという間に時間が経ちました。私も初めて聞く、被災者の体験談もありました。例えば、校舎の屋上ではなく山に逃げて子どもを助けた学校が、実はそこから先には逃げる道がなくたまたま助かったに過ぎないといった証言。これまで美談として語られてきたことが、実はそうではなかったというような話もありました。「その場にいたらどうする？」と問うものになります。盛りだくさんで、リピーター必至でしょう。　行政として、震災の教訓を次世代に伝えるのは伝承施設がスタート。防災と命をどう考えるか。ぜひ、勉強に来て頂きたいです。

チリ地震津波に襲われ、大きな被害を受けた宮城県志津川町（現・南三陸町）の市街地=1960 年 5 月 24 日、朝日新聞社機から

防災対策庁舎と震災復興祈念公園=2020 年 9 月 30 日、宮城県南三陸町

ハード整備終了　心の葛藤続く

――町民有志が、伝えるべき教訓を考える会を開いています。自身は、何を伝えるのが一番大事と考えていますか？　被災者一人ひとりの自らの体験です。他の人からの聞きかじりではなく、徹頭徹尾、自分の体験を。私が一個人という立場になれば、一番訴えたいのは「いのち」と、そして「命を守れ」です。小学校高学年なら、大人の言葉でも十分理解できます。子どもたちの感性を信じたいです。

――当事者の肉声が大事と？　私は、職員派遣や様々な支援をくださった自治体に感謝状を渡していますが、その際に受けた支援のことを言うと「初めて聞いた」という所も多いです。だからこそ、私が話していかねばならないと思います。語り部をする方が増えるのは歓迎です。ただ、人から聞いた話を、受けを狙って膨らませるケースが目立ちます。私は人から聞いたことはしゃべりません。自分が体験したことだけ。自分が確認できないことを話すのは、聞き手をミスリードするからです。実際に現場にいた人間を侮辱することにもつながります。語り部の方に聞きたいのは、あなたの話を実際に体験した人を目の前に置いてその話を語れるか、ということです。いかにもその時、自分が現場にいたかのような感じで話しても、現場を見ている人間には通用しません。語り部の中には、実際に被災した私たちが同行すると「やりづらい」という人もいます。

――後世に伝える事実が違ってきてしまいます。面白くしようとして脚色するケースがままあります。特

南三陸町道の駅（伝承施設等）のイメージ図=隈研吾建築都市設計事務所提供

に SNS は怖いです。防災対策庁舎の屋上で津波を受けたときのことも、事実と違う話がまことしやかに流布しています。伝承施設ができたら、施設の学習プログラムと語り部の話に齟齬がないようにしないといけません。

――「復興」はどこまで行ったら終わりですか？　ハードは伝承施設が最後ですが、心の部分は個々人にしか見えません。トラウマは一生持ち続けていくことになるでしょう。私も、小学校 3 年の時のチリ地震津波で自宅を流され、避難を余儀なくされた心の傷があります。それが震災の時、顔を出しました。心の奥底からなくなることはありません。家族を亡くしていまも泣く人に「復興したね」とは言えません。「完全な復興」が一人ひとりの心の問題である以上、町として復興宣言はするものではないと思っています。言えるのは「ハード整備が終わった」ということだけです。

震災復興祈念公園の開園式で、防災対策庁舎を見上げ献花する佐藤仁町長（右）=2020 年 10 月 12 日、宮城県南三陸町

――心の復興は可能なのでしょうか？　葛藤は続くでしょう。私自身が津波の恐怖感から、まだ車の洗車機に入れないのと同じように。町長としてはハード整備が終われば復興終了と言えますが、佐藤仁としては自分の心の奥底を見つめていくよりほかありません。（大好きなプロ野球）楽天（イーグルス）のゲームだけは、楽しめるようになりましたが。

――地域コミュニティーは元に戻りましたか？　被災で断たれてしまったのは事実です。災害公営住宅や防災集団移転団地でどう再構築していくか。生活サポート相談員（LSA）を派遣して孤立防止を図っていますが、行政が入り込んで作るのは難しいです。

――行政として次の復興期間の課題は？　応援職員は今年度でほぼいなくなります。生え抜き職員だけでやっていかねばならず、従来と同様の行政サービスはできなくなるでしょう。財政調整基金も復興事業を清算すると少なくなると思います。さらに、人口減で交付税も減ります。次の 10 年はこれまでの 10 年とは違った苦しさに直面します。町として何を断捨離するか、考えていかねばなりません。

拾った命　あの日を語り続ける

――人口減対策は？　カネをつけたら人が増えるというものではありません。町を支えたボランティアの方々は延べ約 16 万人います。その方々を交流人口として「町の応援団」に囲い込みます。リピーターも少なくありません。みんな町に誰か会いたい人がいるのです。「町に来てくれた（来てくれている）」という存在感は大きい。町民が「我々は忘れられていない」と思うことは、生きる気力につながります。当時、助けに来て下さった方々に、いまの町の姿をお見せしたい。一人ひとりは微々たる力であっても、それが合わさって、今日の復興につながりました。

祈りの丘で海に向かって黙禱する町職員。左手は 43 人が犠牲になった防災対策庁舎=2020 年 5 月 29 日、宮城県南三陸町

――町は今後、何で食べていくのですか？　水産と観光、林業です。水揚げも、観光客数も好調です。志津川湾のラムサール条約登録も目玉になります。今後どうブランド化していくかが課題です。三陸道が気仙沼まで開通した際、町が通過されるのではないかと危惧しましたが、南三陸さんさん商店街に来るお客さんはかえって増えています。さんさん商店街、復興祈念公園、そして伝承施設。この一帯が、回遊性のある集客スポットになるでしょう。

――10 年前の自分にかける言葉は？　「1 丁目 1 番地だった高台移転を果たしたぞ」と。「簡単じゃなかったけれどできたよ」と。それを胸を張って報告したいです。ただこの 10 年、何が一番つらかったかと聞かれれば、やはり、防災対策庁舎で 43 人亡くしたことです。あなた方物書きはすぐ「気持ちを言葉に」と聞きますが、当事者としては表現できる重みじゃない。超越している。 適当な言葉なんて見つからない。

あれは、そういう衝撃だったんです。それでも、海を恨む気持ちはありません。町民からも聞こえてきません。街は壊滅しましたが、海は豊饒です。この海と共に生きるのが我々の宿命です。私の命は拾ったもの。生き延びた 1 人として、悲劇を繰り返さないために語り続けていく。命ある限り、それが私の役目です。

◇

佐藤　仁(さとう・じん)　1951 年、宮城県志津川町（現在の南三陸町）出身。同町議、同町長を経て 2005 年、歌津町と合併して発足した南三陸町の初代町長、現在 4 期目。東日本大震災の当日、町防災対策庁舎で津波に巻き込まれたが生還。元高校球児で、仙台商遊撃手として 1969 年の夏の甲子園に出場し、8 強入り。趣味はスポーツ観戦で、プロ野球・楽天イーグルスが大好き。1960 年のチリ地震津波でも自宅を流されている。

【参考文献】佐藤　仁著，南三陸町長の3年　あの日から立ち止まることなく，河北新報出版センター，2014.3.28.